

フ ェ ノ ロ サ 管 見

尾 形 敏 彦

初期の日本と外国との文化交流について大雑把に見ると、友好のためにせよ、征服のためにせよ、異文化にひかれた西洋人はかなり昔から日本を知っていた。イタリア・ヴェニスの旅行家マルコ・ポーロ (Marco Polo, 1254—1324) は『東方見聞録』で日本を黄金の国と書き、リーフデ号で豊後に漂着 (1600. 4. 19.) したイギリスの航海家ウィリアム・アダムズ (William Adams, 1564—1620) は大阪に送られて、豪華な宮廷は金で作られていたと書き記した。その2年後の1602年に秀吉が死んでいる。彼は帰化して三浦按針と称した。この頃には、伊達政宗のローマ使節派遣とか、山田長政その他の多くの外国行の話もある。その後、開拓線を海へ進めた実際的なアメリカは捕鯨場を探していた。その一つは金華山沖で発見 (1820) され、翌年には30隻以上のアメリカ捕鯨船が日本近海に姿を見せ、以来同程度に増加し続けた。これは捕鯨基地確保のための開国要求でもあった。徳川吉宗時代にはベーリング (Vitus Bering, 1681—1741) の一部の船隊が東北沿岸にも来ている。また、ザビエル (Francisco Xavier, 1506—52) は鹿児島に来日 (1549) してキリシタン伝道を行い、当初は大成功を収めた。メルヴィル (Herman Melville, 1819—91) の小説『白鯨』 (*Moby-Dick*, 1851) には20回ほどの「日本」という言葉が見られる。1853年にペリー (Matthew Calbraith Perry 1794—1858) の黒船が来航した。1854年に和親条約、1856年にハリス着任の後、通商条約批准のために1860年に遣米日本使節団が出発したというように幕末時代の日米外交は進展した。ホイットマン (Walt Whitman, 1819—92) がこの使節団一行を見て詩に歌った。使節団帰国の翌年 (1861. 4.) 南北戦争が起って日米関係は中断したが、戦後、日米関係は急速に進展した。新島襄が1864年に函館から出帆して、

リンカーン (Abraham Lincoln, 1809—65) 暗殺直後にボストンへ着いた。ボストンでは陶器が日本趣味の人々に喜ばれていた。ロングフェロー (Henry Wadsworth Longfellow, 1807—82) の詩「ケラモス (Kéramos, 1877)」(ギリシア語で陶器) の中に伊万里の壺が歌われている。彼の息子チャールズ (Charles) は来日して多くの壺を購入した。ボストンには東洋趣味が急速に広まり、反対に、アメリカのキリスト教、自由精神、科学技術、教育、文学、進化論、実用主義などの異国文化が日本人の心を動かした。しかし、これに対する嫌悪感、危険視も日本人の間にはかなり強かった。この時代のアメリカに関する知識を直接与えた書籍には1851年に帰国した土佐の中浜万次郎の『漂流記』(1853) や、1859年に帰国した薩摩の浜田彦蔵の『彦蔵漂流記』(1863) などがある。アメリカのほうでは、初期の日本論としてはペリー来日2年後の弁護士、経済学者、歴史家のヒルドレス (Richard Hildreth, 1807—65) の『過去と現在の日本』(*Japan As It was and Is*, 1855; 安政2年) がある。ペリーに同行した詩人で記者のテーラー (Bayard Taylor, 1825—78) は『インド・中国・日本』(1855) という単行本を出した。これは見たままの日本を書いているが、ヒルドレスの本は客観性を目指す歴史家らしく書かれている。教育のないモース (Edward Sylvester Morse, 1838—1925) はハーヴァード大学の進化論反対論者アガシー (Agassiz) 教授の助手になって海洋生物の研究をしていた。当時のアメリカの話題は南北戦争と進化論とであった。観察・実験に努力したモースは教授とは反対に進化論を認めるようになった。やがて、彼はアメリカ芸術科学院特別会員に推挙(1869)され、ボードン・カレッジから名誉学位を与え(1871)られた。西部講演旅行に出たモースは、サンフランシスコから来日(1877.6.)した。39歳の彼は大臣級の2倍の年俸で東京大学で動物学を講義した。モースは4年間在日して進化論を教え、暇には日本中を歩き回った。彼の『日本の家屋』(1889) や『日本、その日その日』(1917) は立派な観察記録である。モースが3度目の来日の時に同行したのが、知人で医者 of ボストンの富豪ビッグロー (William Sturgis Bigelow, 1850—1926) であった。ビッグローはボストンの美術家で有名な医者 of の家に生まれ、ハーヴァード大学卒業後ヨーロッパ留学の5年間に、パスツールなどの大学者について医学を研究し

た。しかし、進路に疑問を抱き、美術と仏教に解決を求めて来日（1881）した。

モースが集めた茶碗は4646個にもなり、ほとんどがボストン美術館にある。ビゲローは後にハーヴァード大学に仏教講座を創設し、初代教授になった。1926秋、独身の彼は高僧の如くに寂した。本格的日本論としては1870.12.—74.7.まで在日した宣教師グリフィス（William Elliot Griffis, 1843—1928）の『ミカドの帝国』（*The Mikado's Empire*, 1877）がある。彼は訪日以前にアメリカで横井小楠の2人の甥、岩倉具視の2人の息子、勝海舟の息子などを教えた。近代化をはじめた日本に共鳴したグリフィスは最初の1年を越前福井で教え、あとは大学南校（東京大学）に転じて東京で一人暮らしをした。しかし、ニュー・イングランド・ピューリタンのグリフィスには宗教的違和感が強く、「異教徒」というような日本批判の言葉が多い。

幕末から維新にかけて西洋文明の実力を知った日本は明治政府成立と共に文明開化運動をはじめた。エマソンの言葉だが、革命時代は唯一の生き甲斐を感じさせる時代である。日本は、そして南北戦争前後のアメリカは、共に革命時代であり、今の日本も革命を必要とする時代である。1857（安政4年）、アメリカ総領事ハリス（Townsend Harris, 1804—78）は、「アメリカ宣教師は300年前にポルトガルやイスパニア宣教師が教えたのとは違って平和的宗教家だと強調して」信仰の自由を強く求めた。通商条約成立で日本におけるアメリカ人のキリスト教信仰が認められ、アメリカ人宣教師が続々と入国し、長崎渡来（1859、安政6年）の明治学院神学部教授のフルベッキ（Guido Fridolin Verbeck, 1830—98）や1876（明治9年）来日の札幌農学校（北大）教頭のクラーク（William Smith Clark, 1826—86）などは入信強制の代りに学芸によるキリスト教の拡大発展を試みた。しかし、20年代になると日本は伝統復帰という国粹主義時代に入った。また、1860年渡米した福沢諭吉は精神的西洋文化を十分には理解しなくてアメリカ賛美に熱中したが、アメリカを知るにつれて賞賛なくなり、内村鑑三はアメリカをキリスト教の聖地だと信じて、1884（明治17年）に渡米したが、アメリカが金銭万能主義の時代で人種偏見に支配される国になっているのを実際に見て失望し、武士道的キリスト教の確立を志した。

王政復古と共に近代化が促進され、近代教育制度が1872（明治5年）に確立し、藩校や寺子屋が廃止され、小学校が設立された。面白いことに、少学校教育に唱歌が取り入れられ（1879、明治12年）、東京師範学校長伊沢修二を御用掛に、アメリカ人メイスン（Luther Whiting Mason）を教師にした。さらに、大学教育のかかなりの部分が専門家ではない宣教師によって行われている状況に反対したモースが来日（1877、明治10年）して東京大学で教え、彼の紹介でフェノロサが来日（1878、明治11年）して文科大学の主要講座を担当した。二人とも進化論者であり、アメリカ帰りの外山正一や矢田部良吉なども進化論を講義した。しかし、フェノロサの弟子の井上哲次郎はドイツ留学後、ヘーゲルの進化論と科学的進化思想を統一しようと試みた。やがて、東京大学ではドイツ観念論哲学が有力になり、ドイツから1893（明治26年）にケーベル（Raphael von Koeber, 1848—1923）などの来日があって、哲学と言えばドイツ観念論を意味するようになった。ケーベルは21年間も東京大学で哲学・文学・語学を教え、東京音楽学校でもピアノを教えた。

さて、フェノロサの父はイスパニアから渡米した音楽家で、音楽教師をしていたが変死した。母は名門の娘で、彼の弟子シルスビー（Mary Silsbee）というアメリカ人であった。フェノロサはハーヴァード大学哲学科を卒業（1874）後、神学部大学院（Cambridge Theological School）に学び、さらに、ボストン美術館付属美術学校とマサチューセッツ美術師範学校に学んだ。6月に同級生の恋人リジーとセーレムで結婚し、大陸横断鉄道でサンフランシスコへ行き、そこから20日間の航海をして横浜に上陸した。新婚旅行として東京を選んだわけである。フェノロサは25歳で300円の高月給で東京大学教師として来日し、1886（明治19年）まで政治学、経済学、哲学を講義した。学生には井上哲次郎、坪内逍遙などと共に15歳の岡倉天心（1862—1913）もいた。貿易商の次男の天心はフェノロサの助手として通訳をつとめ、仏教書や美術書の翻訳もした。フェノロサの仏教への関心は天心の影響であった。天心は英文「国家論」を卒業論文にしたが、妊娠中の若妻と衝突して、妻がその卒論を焼きすてたので2週間で「美術論」を書いて提出したために成績劣等であった。

1887（明治20年）頃、欧米化反省の声、伝承文化保存の必要を説く声があが

った。その目的や方法は多様であったが、底流は伝統文化の衰退に対する警告と反省であった。文明開化、封建体制崩壊、廃仏毀釈による固有文化財の価値喪失が問題であった。フェノロサはとくに洋画の台頭によって危機に面した日本画の再興が古文化財保存に劣らない急務だと痛感し、日本画再興熱にとりつかれた。東京大学教師時代の夏休みには京都・奈良の古い社寺の宝物調査旅行をした。もちろん、上野付近の古道具屋で古美術絵画収集もした。

維新の日本では、没落富豪や寺院などから美術品が放出され、奈良の興福寺の五重塔さえも売りに出されたい。在日外国人の間では浮世絵をはじめ日本美術の人气が高く、その収集熱が強くなった。当時の日本品で世界に通用するものは美術品だけであった。それらの海外流出は、より安全な場所へ移したと考えれば、結果的にはよかったと思われる。1887（明治14年2月）にフェノロサは日本絵画復興のために天心（海外では天心と呼ばれず、いつも覚三と呼ばれた）らと「鑑画会」を創設して月例会を開き新日本画創作を奨励した。委員の一人フェノロサは主に絵画鑑定法を学び、実質的に主導権を握ると、独創的な画家の育成に主眼点を置いた。第4回例会（明治17年4月27日）における講演「日本美術は復興できるか」（“Can Japanese Art be Revived?”）に応えた新日本画創造運動の旗手が、57歳の狩野芳崖であった。やがて鑑画会は東京美術学校として発展的解消をした。フェノロサは天心を中心とする東京美術学校開設に協力した。近代日本画最初のルネッサンスを告げるにふさわしい成果は晩年の芳崖によってあげられた。新しい形式、彩色、明暗法による立体感、遠近法による新表現など近代日本画歴史上の注目点が多い。1886（明治13年7月）には前年に夫人マリアン（Marian Hooper Adams, 1843—85.）を失った作家ヘンリー・アダムス（Henry Adams, 1838—1918.）が、ニュー・ヨーク出身の画家で浮世絵など日本美術の影響を受けて日本文化をかなり知っていたラ・ファージ（John La Farge, 1835—1910.）を誘って3か月ほど見物に来日した。51歳のラ・ファージは来日すると書簡体の随筆を書き、後に『絵画東遊録』（1897）としてニューヨークで出版した。彼は1856年頃からアメリカで版画に接していて『世界の巨匠たち』（1903）を出版し、線画を賞賛した。とくに、ラ・ファージのイメージのなかで最高のものは観音が涅槃（ニルヴァー

ナ)の瞑想に耽っている時のものであって、観音を思うと仏教的な慈悲の観念に打たれるようだというのであった。1879(明治12年7月14日)にフェノロサ夫妻は手伝い1人と車夫5人をつれて人力車で日光旅行をした。自然の風景と人情を楽しんだが、この旅行で第18代大統領グラント將軍と対面した。いかにも日本らしく17日のグラント日光訪問に備えて道路は改修中であった。20日の日光町民のグラント大歓迎会にはフェノロサ夫妻も出席した。政治話がはずむこともなく、ただ会ったというだけであった。また、フェノロサ、ビゲロー、天心は明治17年に奈良法隆寺を訪ねて夢殿の救世観音を見ることができ、その美しさに大に感激し、その微笑をモナ・リザのものにたとえた。両者共に暗い時代背景を見つめて民衆を慰める微笑である。しかし、信仰の対象である秘仏が、はじめて芸術として鑑賞されたのは革新的なことであった。

1886(明治19年)に東京大学から文部省へ移ったフェノロサは宮内省兼務になり、9月19日に一年間の欧米美術行政視察の直前に講演をして、文部事務官天心をつれて出発した。当時、特命全権公使としてワシントンに3年余駐在した九鬼隆一も帰国して宮内省へ移り、全国宝物取調局設置の畿内宝物調査団長(1888.4.)になった。5月5日からフェノロサも参加して東京から海路神戸へ向い、大阪、京都、和歌山、奈良の宝物調査を行った。彼は講演をして、奈良とローマを比較し、古代ギリシア、ペルシアなどの遺品が奈良に渡来していると述べた。8月中旬には正倉院開封の時に調査団一行は京都調査を中止して正倉院宝物を見学した。11月30日から12月6日までの滋賀県調査で三井寺の宝物中、絹本黄不動をはじめ天台密教仏画を調査し、木造の智証大師坐像とか円山応挙の巻物3巻なども調査した。湖上を長浜へ渡り、車で渡岸寺^{ドウガンジ}へ赴き木造の十一面観音立像を見て感動した。それから竹生島へ渡り宝厳寺の宝物を調査し、さらに、天津へ戻り坂本の聖衆来迎寺^{ライコウジ}で滋賀の正倉院と言われる宝物を調査した。これらはフェノロサの遺著『東亜美術史綱』に詳しい。

芳崖最後の傑作「悲母観音図」(明治21年)には東洋の神秘芸術の伝統に西洋画の影響がうかがえる。彼は狩野派の天才として欧米の絵画に立ち向い、日本画の近代化に尽力したが、東京美術学校開設など、その後の日本画の興隆を見ることなく明治21年に没した。フェノロサ来日頃、幕府崩壊のために幕府御

用の狩野派は惨めな状態に陥って、高い評価は洋画と文人画だけに与えられた。フェノロサは明治15年に上野公園の教育博物館で行った講演「美術真説」のなかで洋画と文人画とを「真の画術」を圧迫するものとして攻撃し、第2次世界大戦後にセザンヌやゴッホに並ぶものとして西洋で高く評価されてきた儒学者で文人画の大家である富岡鉄斎（1836—1924）の作品もフェノロサは芸術とは認めなかった。狩野派だけを「真の画術」だと評価した。彼は鎖国300年の美術の伝統が狩野派によって守られたと考え、その後継者を芳崖に期待した。古典主義のフェノロサは東洋の理想を中国唐代の画家達に発見していた。そして、「観音立像」をラファエロの「聖母マリア」に匹敵すると絶賛した。こうして、明治の日本画はフェノロサ、天心、芳崖によって推進された。

1888（明治21年）に東京美術学校（the Tokyo Fine Arts Academy）が開設されフェノロサは美術史の講義を担当したが、文部省は西洋美術導入に熱心で日本の伝統を重視しつつ新日本美術創造を目的にした天心を嫌った。天心は1898年に校長を辞して、帝国美術院（the Imperial Museum）を創設した。天心辞任の時、近代日本画草創期を代表する橋本雅邦、横山大観、菱田春草など17人も一緒に辞任した。彼等は19世紀フランスの自然復帰派にならって日本バルビゾン派を志し、茨城県に研究所を開設した。この開設にはビグロー達が援助の手を延べてくれたが財政難であった。この美術院の新画法は朦朧体と称したが、評価されずに天心は失望した。すでに芳崖は世になく、フェノロサは仏教徒になって1890年（明治23年）に帰国し、新設のボストン美術館東洋部初代部長（1890—97）になっていた。ビグローは美術工芸品2万余点をボストン美術館に新設の日本部に預け（1890）、後に寄贈した。ビグローは父の没後、父に代ってボストン美術館終身理事に就任し、失意の天心をフェノロサの後任としてボストン美術館へ招いた。天心は日本画の東京美術学校第1号卒業生の大観と早春と陶器の六角紫水達の作品展のために彼等をつれて横浜を出港（1904. 2. 10.）した。当日は日露宣戦布告当日であったが無事ニューヨークへ到着した。ニューヨーク・タイムズは天心を洞察力に富み、博学な評論家だと賞賛し、その歓迎に天心は感激した。1896年（明治29年）にフェノロサはヨーロッパをへて再来日して1900年（明治33年）まで東京高等師範学校（the Im-

perial Normal School) で英語英文学を教え、帰国後はコロンビア大学教授として比較文学の講義を担当した。翌年来日したのが最後の訪日になった。アメリカとヨーロッパで東洋美術について講演と執筆に尽力した彼も主にメアリーの家に近いモーバイル効外スプリング・ヒルの新居建設(1902)費に意外の資金が必要になったりして経済事情から愛蔵の多くの浮世絵を売却した。さらに芳崖の「観音図」までも手離した。1908年に彼はロンドンで心臓麻痺のために客死し、ハイゲート共同埋地 (Highgate Cemetery) に仮埋葬されたが、遺志によって滋賀県法明院に改葬され、13回忌には東京美術学校(芸大)に記念碑が立てられた。フェノロサは詩集 *East and West* (1893) や日本美術に関する *The Masters of Ukiyo* (1896) などを出版したが、主著は *Epochs of Chinese and Japanese Art* (1912, 2vols., 2d ed.,) で、これは死後、後妻メアリー (Mary McNeill Fenollosa) によって出版された。ここで天心について一言だけふれよう。20世紀初期のアメリカは文化の伝統的価値観崩壊の時期で、機械文明と大量生産が広まり、芸術家は疎外されて、それに不満なボストンの知識人達は新価値観を探して、東洋文化、とくに宗教に精神的満足を求めた。天心はビゲローを通じてルーズベルトのアメリカ政府と連絡してロシアに働きかけたことがあったので、1年ほどロンドンに滞在して帰国した時にアメリカで対ロシア戦を支えたと自負した。天心に従って渡米した横山大観は天心が空気を描けと言ったので月と海を多く描いて、朦朧体を進めていたが、帰国後には朦朧体よりも色が明るく写実的になった。写実画へ向った日本の近代化は大観によってはじめられた。ラ・ファージの手配で有名なセンチュリー・アソシエーション (Century Association) 画廊で朦朧体の日本画展覧会が開催されると、予想外の好評でよく売れた。ついでながら、亡妻マリアンが5歳の時に死んだ母はエマスン達と親しい超絶主義者であった。アダムズは冷笑的であったが、仏教的な着想を得ると、多くの骨董品を買いあさった。ビゲローはバリの古美術商からも刀剣、漆器をはじめ大量のものを買い、それらはボストン美術館に収まっている。そして、ミズーリ州のセント・ルイス万博 (1904.9.) で講演予定のルーヴル博物館長が急病のために講演をキャンセルしたので、天心は万博で大聴衆に講演する機会を与えられ、「絵画における近

代的問題」(“Modern Problems in Painting”)と題する講演を行った。宗教芸術を育てた中世ギルドや日本の寺院を回想して現代社会の状態を嘆いた。西洋化、近代化、産業主義化を進めようとする日本で、いかに伝統芸術を守っていくべきかを問い、さらに、芸術家が社会から疎外され、真の芸術の育成が阻害されていると訴えた。天心は「芸術それ自体が宗教である。神聖なものを描いたと言っても、その絵が神聖だとは言えない。宇宙に対する気高く、真摯な態度をもってこそ宗教的画家と言える」(*Modern Problems in Painting*, 後に “Modern Art from Japanese Point of View,” *Okakura Kakuzo—Collected English Writings*, Tokyo: Heibonsha, 1984, II, pp. 60—81)と述べた。講演は好評で直ちにフランス語、ドイツ語、イタリア語に翻訳された。天心の近代化と産業主義に対する抵抗は多くのアメリカ人聴衆に共鳴された。

1906(明治39年)に完成したのが天心の代表作品『茶の本』(*The Book of Tea*, 1906)である。これは天心が西洋文明の誤りを感じて文明の進路変更を迫り、西洋模倣は軽々しくなすべきではないと述べたものである。天心の渡米以前にもフェノロサやモースが滞日経験をもとに日本文化を紹介し、ボストンの日本熱は非情に高まっていた。訪日経験者の多くは帰国後、日本で経験した茶の湯をアメリカでも試みようとした。ヘンリー・アダムズも駐米大使吉田清成に和服着用をすすめて茶会を楽しんだ。茶室を建てて楽しんだ富豪もあった。ラ・ファージに捧げられた『茶の本』には天心の人生観がよく現われている。天心は日常生活のなかに美を見出し、茶は日常的総合芸術で東洋民主主義の精髓であり、西洋が東洋に学ぶべきものは「茶の心」に表現される東洋精神だと説いた。とくに、第3章「道教と禅」においては、天心は道教は現世であるがままに受け入れ、苦難に満ちた現世にも美を見出そうとする点で儒教や仏教とは異ると説き、「アジアでの道教の貢献は美学の領域にあった」(*Okakura Kakuzo, The Books of Tea*, Tokyo: Tuttle Co., 1982, p. 44)と言った。道教とは処世術を説いたものであると天心が語った点、哲学と言うよりも処世訓と言うべきエマソン思想に通じるものがある。『茶の本』は海外における日本文化紹介の古典と言われる。天心没後、『茶の本』に強い影響を受けたアメリ

カの建築家にライト (Frank Lloyd Wright, 1869—1959) がいる。ライトは『茶の本』に影響されて独特の建築法を考えた。ライトは東京の旧帝国ホテル建設で知られている。この竣工式当日に関東大震災が起ったが、ホテルは倒壊しなかった所以ライトは日本だけでなく、アメリカでも有名になった。その後、ライトは長く浮世絵にひかれ1905年に再訪日して浮世絵を買い集め、その翌年、「広重」を中心にシカゴ美術館で博覧会を開いた。西海岸カリフォルニアには日本風家屋が建てられ、枯山水の庭までもあった。しかし、1930年代には日本熱は急速に冷えた。日本には独特の思想がなかったからである。フェノロサやビゲローなどには仏教思想は魅力を持つものであると同時に異文化に対する興味の対象であった。

フェノロサと仏教について見ると、フェノロサはキリスト教の雰囲気になか育った。キリスト教では生活地盤が、天、神、イエス、マリアなどというものに置かれている。罪の世界から神の国への甦えりを願っても、人間の側からはその実現は不可能である。神の自由決定で、人間の自律の全くない完全他律である。近世になって自律があることに気づいて自信というものを持ったので、近代人が神を信じると言っても、その神は中世キリスト教徒の信仰とは別物である。ニーチェは、神は死んだと言った。現在では危機神学、ニヒリズム、実存主義その他いろいろと自律の人間の危機脱却が考えられている。これらは一見、反科学的非合理主義とか中世的他律を求めているようでもある。これに対して、救いは最初から自分の脚下に与えられていると教えるのが仏教である。仏教は無神論であり、自律の悟りを求める宗教である。いわば、自分自身が神になるのである。真のキリスト信者においては、イエス・キリストと言うとき、それは現実の人間で神と人間の間の仲介者だが、元来は神であって、罪人である人間とは完全に異なる特殊なものである。エマソンは『神学部講演』のなかでキリスト教の儀式を否定して、神そのものとの直接対話を求めた。キリストを仲介者にして、空想の神を信じるのがキリスト教であり、神の存在を考えずに戒律だけを守るのが仏教だと大雑把に区別することができる。

最も重要なキリスト教と仏教の立場の相違点を見ると、キリスト教徒が愛について語り、実践するとき、彼等を励ますものは「……愛がなければ教うるに

たらず、……愛は寛容にして慈悲あり、……非礼を行わず……憤らず……信仰と希望と愛の三つのうち最大のものは愛である」（「コリント前書」）というパウロの言葉である。また、マルコ伝とマタイ伝でも「自分の如くに隣人を愛すべし」とイエス・キリストは述べている。キリスト教が愛の宗教であるのに対して、仏教は慈悲の宗教である。釈迦の教えは自己形成の道であり、「自分の頼るべきものは自分だけである。……自分を知り尽すとき、人は頼るべきものを得る」というように、自分を知り尽すことが最高の人格形成になると釈迦は言った。従って、釈迦の道に従う者は、まず自分に向かわなければならない。釈迦は「一切の世界に対して無限の慈悲心をもってせよ」と説いた。それは、万物に安楽を願うことであり、難行苦行をなすことなく、慈悲心を養うだけでいいと説いたのである。キリスト教は「神は愛なり」と他律的な愛を説き、仏教は、「仏心とは大慈悲心なり」と自律的覚醒を説いた。釈迦は一人の婆羅門が「汝も自分で耕して食うがいい」と言った時、「我もまた耕す」と答えた。精神世界における開拓を釈迦は言ったのである。

キリスト教における愛の実践は神の愛の模倣として行なわれる。人間の愛（「エロス」）がいかに高められても神の愛（「アガペー」）には質的相違によって及ばない。「敵を愛し、敵のために祈れ」と言い、「もし人、汝の右の頬を打たば左をも向けよ」と説いたのは、「天にいます父の子になるため」であった。このように祈ることによって、はじめて人間の愛から神の愛に人間は入ることができるというのである。これに対して仏教における普遍的な愛は慈悲を通して万人に広がってゆくのである。祇園精舎で一人の婆羅門に「出家の道は自分一人の安心解脱を目的とするから一人のための幸福の道を求めるもので、多数人のための幸福の道に比べて劣る」と言われたとき、釈迦は「私は自分の苦悩の解決を求めて出家し、この道を発見し、この道によって解決できた。そこで人々に説いて、ここに道があるから、この道を歩んで解決に至るがいいと教えている。多数の人がこの道を行けば、これは一人の幸福への道ではあるまい」と答えた。これが釈迦成道以来45年にわたる彼の伝道精神であった。愛と慈悲は一般に同様に考えられ、フェノロサに於てもそうであってキリスト教徒から仏教徒に変わりやすかったと思われる。しかし、両者は思想内容も論理構造

も全く立場を異にしている。フェノロサが帰依した天台仏教について簡単にふれよう。初期の仏教教団は多くの部派にわかれたが、やがて仏陀教説として簡明な阿含教典が成立した。正確を期してその注釈中心の教義研究を進めたのがアビダルマ (abhidharma) 諸派である。印度神話からはじまったバラモン教の権威が落ち、階級制度が衰退した頃、新思想を求めて出家する人々が出現し、その一人が仏陀であった。バラモン教はヒンドゥー教となって残った。アビダルマ諸派中で最多の論文を残したのが「説一切有部」(Sarvastivadins) である。仏滅後200年頃から西北印度に広まり、数百年かかって阿含教理を体系化して、有部独自の思想体系を作った。それが前5世紀頃の『阿毘達磨俱舍論』(Abhidharma-Kosa) である。しかし、仏陀の教説が簡明に示されている阿含経をあまりにも観念的に複雑化したので仏教本来の立場とは異なるところが多い。後世、これらは小乗仏教とか煩瑣哲学とか呼ばれた。初期仏教思想の検討である『俱舍論』は阿含体系の理論的分析に専念しすぎたところに無理があった。阿含教の中心は一切無常にあり、無常の論拠は縁起説にある。すべてが、神の被造物とか偶発物とかではなく、因果関係で成立していて、あらゆる存在の要素が因果律によって集合離散をくり返し構成されているというのである。

阿含経成立後、仏陀と阿羅漢 (arhat 供養を受けるにふさわしい人) とは同義語に用いられ、何人も正しい知恵によって煩惱を断てば悟りの境地に至りうるとされてきたが、アビダルマ仏教によると凡夫が聖者になって阿羅漢になる悟りの道と、菩薩が仏陀になる道とは峻別された。『俱舍論』における悟りの世界とはあくまでも阿羅漢として涅槃を得ることである。すべては心によって生じ、心と無関係なものはあり得ないというのが根本原理である。

叡山の入唐僧円珍は真言密教と天台止観の両業を広めよという勅命を受けた時には帰朝後8年目、53歳であった。叡山は両業勤修の道場だから、かつて最澄が空海に密教教典借覧を乞うた時、「最澄、入唐するも真言を学ばず」と罵倒された。法弟円澄も空海に「本源と力を争わず」と懇請したが空海の意志は変らなかった。結局、脱空海を唱えたのが最澄の弟子円仁であった。彼は838(承和5年)入唐して、847(同14年)まで約10年の留学で顕密両教の奥儀を究め、さらに、大蘇山の法華三昧、清涼山の常行三昧などを日本に伝えた。そ

して、空海が律部教典と軽蔑した蘇悉地経を円仁は金剛頂経、大日経に並ぶ真言三大経だと尊重した。叡山における密教不備を補うためにこう言ったとはいえ、ここに空海の東密と叡山の台密との相違点は明白になった。さて、円珍は空海の姪の子だとも言われるが、851（仁寿元年）入唐し、858に帰朝し、天台別院とされた園城寺（三井寺）の住職になった。円仁招来の新法中で金剛頂経と蘇悉地経を彼の二大業績だと円珍は断言した。彼は朝廷の信頼は厚かったが、教理的には劣っていて、円仁の弟子安然のほうがすぐれていた。円珍は思想的に空海の「十住心論」と「秘蔵宝鑰」を批判した。円珍は大日如来が中心だが、その応身である釈迦如来が法華経を説いたから、両経同一という認識を持っていた。台密は胎藏界大日如来を中心にして真言密教と天台法華を融合させようとしたのである。70歳の円珍は883（元慶7年3月）に青年時代を回想して、真言即法華、金剛即胎藏、真理は一つと書いた。生涯にわたって空海を攻撃した円珍のあとをついだ秀才の安然によって台密は東密を敵視する必要がなくなった。

仏教各宗派にはそれぞれの価値観に基づいた教学（教相）と実践（事相）と教化伝道がある。空海の『三教指帰』（上・中・下・三巻）は797空海24歳の著述である。三教とは儒教、道教、仏教を言い、まず、儒教を道教の立場から批判し、道教を仏教の立場から批判して、仏教真理を最高と断定したものである。これは日本最古の思想批判であり、後年の空海主著『秘密曼荼羅十住心論』10巻をもって完成した日本最初の批判全書とする。空海は考え方には浅深があり、各宗派の教えはすべて聖人の教えだから、ある教えを学べば別の教えから批判される理由はないと考えた。『三教指帰』における仏教と儒教の論点は人間関係の問題がテーマであり、道教と仏教の論点は永遠性の問題がテーマであった。永遠性の求める法は禁欲修業なりというのは各宗共通の考え方であるが、相違点は修業に如何なる意味を見出すかということにある。仏教では、地獄・極楽は自業自得で、現世にとどまる限りは苦は永続すると考えた。『十住心論』では、法相、三論、天台、華嚴を第5、4、3、2、位に置き、真言を最高位に置いているが、各宗派からの反論はなかった。

密教とは一般向の大乗仏教のなかに生まれた秘密教であり、空海が真言密教

として体系化したものである。これは、各人が超越的存在と直接交渉をして、一体化しようとする神秘主義である。日本密教では、各人が小宇宙として大宇宙に包まれていると同時に、自分という小宇宙のなかに大宇宙を含み、両宇宙を同質と考えるものである。自分が宇宙で、宇宙が自分だと考えるのが密教である。釈迦は眼前の月輪を胸中にいれて、自分が月になった時に縮小しはじめて自分と月が別になった瞬間に前人未倒の境地に達すると考えた。無限の偉大さと力とを持った神と直接にふれたという実体感によって心に高い新境地が開けるという意識を持つというのである。後には加持祈禱など呪術的要素を積極的に取り入れた。起源4—5世紀に成立したのが印度の初期密教である。それが中国をへて、日本へ伝来したのは奈良時代であった。その頃の密教は空海や最澄が伝えた純粋な密教（純密）に対して雑部密教（未整理の密教）と呼ばれた。これは呪術中心で現世利益を願い、容易に日本社会に吸収された。奈良時代には国家公認ではないが呪術を使う山林行者が多く、役小角（舒明6年）などはその代表者である。そして、国家公認僧も現世利益に注目して遣唐使に加わり競って雑密經典を輸入し、それが山林行者間に広まった。

印度では7～8世紀頃に密教研究が頂点に達し、雑密が整理されて純密が成立し、『大日経』と『金剛頂経』に集約された。大日如来を本尊とし、即身成仏のための三密修行が確立され、曼荼羅が創作された。この時代においてガンジス河畔に生まれた『大日経』は南印度で完成し、他方、『金剛頂経』は唐へ伝わり、空海が806（延暦25年）に日本にもたらした。中国で恵果阿闍梨が両系統を統合して密教思想体系を創ろうとしたが果たせず、すべてを弟子の空海に託した。最澄は竜興寺の順暁に『大日経』系の密教だけを学び805（延暦24年）に帰国して、日本最初の密教学教団である天台宗を開き国家に公認された。しかし、前記のように、台密完成は弟子達の入唐求法の努力によって遅く達成された。その後、三井寺の増誉を中興とする天台修験道が起り、現在の聖護院修験道になった。空海の真言密教は法力による国家鎮護を志し、彼自身、生涯50余回の秘法を厳修した。真言密教は即身成仏を目的とする出世間の修法と現世利益を目的とする祈禱修法とを同時に行った。天台宗もこれを模倣して国家鎮護の祈禱をはじめた。この傾向に反発して真言律宗や鎌倉新仏教が生ま

れ、密教勢力は衰退に向った。かつて、空海は弟子達に、疑うことなかれ、万法自身の元一体、金剛界大日如来は雨煙る山頂の岸壁にこそ出現すると言った。これはエマスの大霊に通じ、フェノロサも感動したであろう。両者共に Self-Reliance 思想の具現化である。修験行者は疲労消耗の極地に、空中飛翔感に襲われ、火炎の輪宝が重なる破魔になって現前する。恐怖の魔神が住む闇の彼方の山頂から迫る夜気と静寂に向って、法力を求める行者は九字を切り阿字観に入る。ここに真言密教最大の魅力が存在する。ここでカリスマ不足のために逡巡して、自分が神になりきれず、また神を捨てきれなかった、エマスの思想はフェノロサにかなりの影響を与えたと思われる。しかし、南北戦争後のアメリカ社会は神の役割をほとんど無用だと考えた。神と人間とは、ある程度までは相互補完的であるが、現代では再びニーチェのように神は死んだ、いや、仮死状態だと言ってもいいように私は思う。

フェノロサが仏教にひかれたのは、芸術品としての仏像や仏画の東漸に対する興味が直接的で、間接的にエマソンに影響されたからであると言ってもいいと思う。フェノロサは大衆の生活を救う流行仏である観音を仏画の伝統的画題として残すべきだと考えた。日本の仏画は4世紀以上も独創的發展をせずに形式主義にとどまっていた。この伝統的な形式を捨て去り、創造的観念の力を復活させなければならないとフェノロサは考えた。しかし、この考え方を彼はすべての人々に要求したのではなく、そのような画家の一人が狩野芳崖だと断定した。やがて、来日したビゲローが天心と親しくなり、仏教に注目した。ビゲローは天心とフェノロサと一緒に大津市園城寺（三井寺）山内の法明院住職の桜井敬徳律師から梵網菩薩戒を受けて仏教に帰依した。この年の夏、フェノロサを東京大学外人教師に推薦したモースも参加して、東京から大阪まで古美術蒐集旅行に出かけ、大津でも蒐集した。ビゲローはフェノロサ在日の7年間、一緒に美術品蒐集を続け、終生、互に理解者であった。後にフェノロサをボストン美術館東洋部長に推薦したのもビゲローであった。フェノロサは東洋美術研究の結果、進んで背景の東洋文化を知ろうとして、仏教だけではなく漢詩を森槐南に、易を根本通明に、謡曲を梅若実に学んだ。しかし、彼はハーン同様に日本語を理解できなかったのみならず、宗教的には懐疑的であったからキリ

スト教と仏教の相違はわからなかったと思う。その点も、万物同一というエマソンのルート論の影響があったと思われる。フェノロサは関西出張の度に法明院を訪ね、茶室「時雨亭」で瞑想したと言われるが、彼が天台密教の本格的修業をした様子はなく、実際にそれは出来なかったと思う。フェノロサ二度目の来日の時には(1896. 9.) 京都滞在中に法明院を何度も訪ね、夫人メアリーも桜井律師の後継者(直林敬円師)から受戒して「光瑞」という法号を与えられた。明治23年に帰国してからのフェノロサの活動は物質文明に支配されたアメリカへ東洋の精神文化を導入し、新文化を新天地に実現させようというものであった。そして、東洋の理想は仏教興隆によって果たされた日本にしか期待できないと彼は考えた。しかし、仏像を信仰の対象というよりも美術品として受けとめた彼らは仏像鑑賞家達であった。その方法は、第一に仏像を対象とした叙情詩を作ることであって、浪漫的な一種の精神的逃避である。第二は実証的鑑賞法であり、仏像の様式論である。これは時代や場所を研究するもので日本美術史学会の方向である。いずれも信仰とは言い難い。もし、外形だけの美術鑑賞ならば、形のなかに心がかくされているから仏像は何も語りかけない。宗教は心の問題である。外形の変化のなかに思想の変化や心の変化がかくされている。釈迦像は印度から中国を通して日本へ来るまでに顔や形の変化があり、各国の仏教思想と社会思想の相違を示している。例えば、奈良時代の阿弥陀仏は説法者であり、平安時代のものは瞑想し、鎌倉時代以後のものには立像が多い。ここに仏像の外形を変えなければならなかった心と社会の変化が読み取れる。形のなかにある心の探求を無視すれば仏像の意味を理解することはできない。人間文化とは客観化された人間精神である。仏像はその時代精神を客観化した具体像である。仏像の背後には如何なる思想があり、どのように日本人に崇拝されているのかを考えなければならない。信仰としての仏教はフェノロサの生涯の関心事から見れば少部分であった。彼は美術評論家であった。フロイト(Sigmund Freud, 1856—1939.) は信仰とは無用の幻想にすぎないと述べ、ユング(Carl Gustav Jung, 1875—1961.) は心理的には神は存在すると言った。エマソンは神とは道徳感情のことだと考え、理性を含めてすべてを超越する存在、思考次元を越える存在であって、神という言葉以外では表現できないもの

が神だと言った。それゆえに、形式主義、権威主義に陥った歴史的キリスト教を打倒して、神と人間靈魂を抑圧状態から解放しようと考えたのであった。

富嶽36景などで有名な江戸期の浮世絵師葛飾北斎（1760—1849）初期の「幻の肉筆画」が現存していると報じられた。約百年前に初めて開かれた「肉筆北斎展」の図録にだけ記載されていて行方不明の「鍾馗鬼退治」の絵が北斎青年期の「クサムラシユンロー叢 春 郎」の署名と朱印付で発見されたというのである。調査の結果、1900年（明治33年）に肉筆北斎展が開かれた時にフェノロサが出版した同展図録のなかの「中国武人」という画と一致していた。「中国武人」は解説文が残るだけで行方不明になっていた。その肉筆画が発見されたという新聞記事である。これは古典主義者フェノロサが東洋の理想を中国唐代の画家達に発見していたことを示す解説文である。また、フェノロサが科学的アメリカ人であった一面を語る新聞記事（「日経」平成10年6月16日）もあった。フェノロサの防災についての話で、概略すると、「明治時代に文化財保護思想を先取りした遺物が奈良県桜井市の聖林寺にある。脇仏の国宝十一面観音立像の厨子だ。石造りの車輪とレールがあり、非常の時には台座ごと堂外に引き出せる設計だ。日本仏教美術再評価に功績のあったフェノロサが特注寄進したものだ。1888年聖林寺を訪ねたフェノロサは『この仏像は奈良盆地中のいかなる素封家の財宝をもしのぐ』と言って、この観音像と対面すると、その芸術的完成度の高さに息をのんだ。50円を託して厨子を特注させた。厨子は高さ約3.5メートル、幅・奥行とも1.8メートルで、幅約10センチ、直径20センチの車輪付で2本のレールが敷き込んである。フェノロサは簡単なスケッチを描いて説明した。厨子の床には『用心のため宮内省属米国人フェノロサ並ビグロ2名この厨子を寄付するものなり。明治21年秋云々』と墨書されている。この仏像は大神神社の大御輪寺の本尊として長く安置されていたが、1868年（慶応4年）神仏分離令が公布されて聖林寺に引きとられたという。この像には1967年に専用収蔵庫が出来た」と記されている。日本の倫理、道徳を支えてきたのが宗教だが、日本が精神的に欠落してきたのは宗教を離れたからにはかならない。余談になるが、全知の最高神アフラ・マズダーと無知の大魔王アラン・マンユのもとに王国を形成するゾロアスター教のアルドウィー・スーラー・アナーヒター女神は水神だと考え

られ、起源不詳だが、印度ではサラスヴァティー（弁財天）とされたこともあり、メソポタミアのイシュタル女神にも似ていて、仏教の観音の起源とも言われる。美術評論家フェノロサはこれらの興味深いことも考えたのであろうか。

18世紀インドの執政官で弁護士のウィリアム・ジョーンズの東洋学には注目すべきものがあった。これが、後にエマソンやソーロウ（Henry David Thoreau, 1817—62）達超絶主義者にアメリカ・ルネッサンスの花を開かせた。フェノロサ自身がハーヴァード大学で熱心に聴講したのはエヴァレットの比較宗教学とノートン（Charles Eliot Norton, 1827—1908）の美術史とであった。南北戦争前後の精神的荒廃の時期にはアメリカにオカルトと美術のブームがあった。建国100年記念のフィラデルフィア万博ではフェノロサは会場内の美術館に一週間通いつめ、ヨーロッパ絵画に傾倒してアメリカ美術の貧しさとアメリカ人の美的感覚の乏しさを痛感した。翌年に開設間もないボストン美術館付属絵画学校へ通い、実地に練習して、美術批評の分野に進もうとした。ノートンからモースを通じて東京大学に雇われることになったのはその2年後（1878年4月）であった。

先輩エマソンは「コンコードの聖人」として、文明精神の具現者として、日本にも影響を与えていた。すぐれた日本人は留学中にエマソンを読み、エマソン自身の講演を聞き、帰国後にエマソンの作品をテキストにした。エマソンの講演を聞いた神田乃武や外山正一は帰国後、さかんにエマソンの作品をテキストにして講読した。また、徳富蘇峰をはじめ多くの日本人がエマソン愛読者になった。日清戦争後、蘇峰は世界一周の途上でコンコードによってエマソンの墓にもうで、エマソンの遺族にも会った。エマソン文学の真骨頂は理想と知恵が調和するというもので、文明開化の明治人がアメリカ文学からうけた最初の精神的衝撃であった。徳富蘆花や国木田独歩の作品にもエマソンの影響が影を濃く落している。さらに、ソーロウの『ウォルデン』（*Walden*, 1854）の影響も無視できない。また、高村光太郎をはじめ、ホイットマンも日本近代文学に大きな影響を与えた。北村透谷のような暗い運命の人は明るい大道を闊歩したエマソン、ソーロウ、ホイットマン達の文学から衝撃を受け、勇敢に戦って敗れた。透谷のなかには現世を超越しようという浪漫的な願いと現実的な思いが

争っていた。しかし、エマソン達にとっては現実的になることが浪漫的になることであった。エマソンの代表的作品『自然論』（1836）には、自然に対して他人の思想を通してではなく、直接に自分で関係をもつべきだと書いてある。現世は完璧だと信頼していたからである。エマソンの大霊（Over-Soul）とは偏在する一種の精気にはかならない。透谷の『エマルソン』（1894）は日本最初のエマソン論であるが、事實は精神の記号だという青年期エマソンだけに重点をおいている。透谷は25歳で自殺する運命にあった。エマソンの超絶的自我が透谷最後の手がかりであったが、それは夢に終わった。エマソンによって安心立命を得たと感じたのは功利主義者山路愛山であった。彼はエマソンのプラグマティックなところに注目したのであった。『自然論』から宇宙は因果の連鎖で無限に続く円環だと考えた「円環論」へと進む青年エマソンの超絶主義はアメリカ浪漫主義の精華であった。彼の前半生は Self-Reliance と呼べばよかった。透谷はエマソンを自分の支えにしたのだが、精神も社会もエマソン達のものとは全く違っていた。

エマソンがフェノロサとある程度の共通点をもつのは、青年時代のエマソンである。『神学部講演』のなかで「歴史的キリスト教は魂の教義ではなく、個人的なもの、実証的なもの、儀式的なものの誇張である。キリスト教は今も昔も有害な誇張でイエスについて語っている」と述べて、宗教的価値と、その見せかけとを区別した。エマソンは歴史的キリスト教に「宗教精神」を見なかった。エマソンは渡米2代目から代々牧師のいわゆるアメリカの貴族としてボストンに生まれた。1829年にピューリタンの大物インクリース・マザーと息子コットン・マザーが長く牧した有名なボストンユニテリアン第二教会の牧師になり、新時代の宗教家になろうと勇氣をもって望んだ。しかし、この希望は続かずに、3年後には特定の宗教団体に所属するのは自然ではないと考え（1831. 6. ），礼拝式は宗教的見世物だと判断し（日記10. 27. ），儀式に独善と排他を発見して、それを視野の狭い思い上りだと断定した。そして、儀式を排除するクエーカーのジョージ・フォックス（George Fox, 1624-91）の伝記に慰めと励ましを得て、10月に「まことの人」（“The Genuine Man”）という最終説教をして教義と儀式に捕われない Self-Reliance の精神を説いて、委員会で30：

25票で辞任の許可を得て、29歳のエマソンは教会を去った。これ以後、暗い反省がなくなり悪の問題は彼の日記から消えた。エマソンの Compensation（報償）と Self-Reliance の思想は躍進した。自分の新思想を試すためにヨーロッパへ向った彼は多くの文人に会って影響をうけたが、自分の思想に自信を持つことができた。コールリッジの *Aids to Reflection* やサンブソン・リードの *スウェーデンボルグ論* やゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe, 1749—1832）の諸作品などの影響で、非社交的な冷たい性格、弱い身体、妻の病死、弟の発狂などつらい経験に立ち向ったエマソンは Compensation の思想をいよいよ固く信じた。エマソンは自分の性格的な弱さを克服するための Self-Reliance を 1830年頃に God-Reliance の一形式として意識した。「熱心に自分の理性に耳を傾けると、真理に、神に頼ることができる」（日記1830.9.27.）とエマソンは書いた。“Trust thyself; every heart vibrates to that iron string” と人々を励ました。青年達に “Hitch your wagon to a star” とエマソンは言った。自然全体が人間精神の陰喩であって、木の葉も風景も日光もすべて似たような印象を与えると無差別的に言うのがエマソンの特色である。超絶の果てに現れたものが、もし宇宙の大真理である神ならば、人間は拡大して神の流れが全身をめぐり、完全に神の一部として吸収されてしまうと考えた。それが元通りに縮小して人間になった時の体験を持った人を真言・天台密教では覚者（悟った人）と言うのである。エマソンは、事实は精神の記号で、仏像を見たままの仏像と見るのは芸術家であり、仏像を精神の具現化したものと見るのは信仰者であると言った。エマソンの神とは大霊と彼が呼んだものであって、彼の思想はウパニシャッドの梵我一如思想に近い。彼が言う絶対者（Over-Soul）にはインド思想の影響がある。

エマソンにおいては神と人間と自然とはその根本において同一である。カルヴィニズムにおける人間の罪惡説も運命予定説もエマソンは否定した。また、一切の存在は神性をもつというエマソンは悪は善の欠乏だと考えた。これは悪の世界を幻だと考える印度思想に近い。エマソンには裁きの神は存在しない。エマソンは自然神教（Deism）の基本的立場を継承しつつ、これを進めて印度宗教の根本理念に接近した。エマソンの思想は生涯ほとんど変化しなかった。

彼が牧師就任時、すでに前任者は、エマスンは聖書から逸脱するほど自由すぎることを見抜いていた。このエマスン以上に実践面で東洋思想に傾いたのがエマスンとは根本的に相違する超絶主義者ソーロウであった。ソーロウは“*This world is but canvas to our imagination.*”と言った。人間は何のために働き続けるのか。財産の乏しさなどは問題ではない。勤勉は善で怠惰は悪だという無意味な固定観念を捨てるべきである。砂上の楼閣にすぎない衣食住などに苦勞する必要はなく、好きなことだけに打ち込むべきである。病気とは自然を離れた人間の幻想にすぎず、天地のエネルギーが減った現象である。このエネルギーを吸収して自然治癒力を最高度に発揮するのが健康法だとソーロウは信じて実践した。彼は44歳で肺結核で世を去った。死ぬ時に死ねばよく、寿命の長短などはどうでもいいのである。79歳で急性肺炎のために死んだ先輩エマスンは59歳の時にソーロウの葬式に出席し、その3日後にやや辛口のソーロウ追悼演説を行った。ソーロウは人間の幸、不幸は自分の外部に存在するのではなく、あくまでも自分の内部に在るのだから精神活動に注目せよ、労働の必要はない。このように価値観を変えれば、安心立命の境地が出現すると考えた。森を散歩するソーロウの皮膚は木の皮のようになり、小動物や鳥とも友人になり、池の魚とも語ったというソーロウは修験道の行者であった。すべてが自然に始まると考えたソーロウは人間も自然の一部であるとエマスン同様に実感した。ニュー・ハンプシャー州北部のホワイト山脈（*The White Mountains*）の最高峰ワシントン山登頂も、メリマック河の水源地探検もソーロウにとっては真理探求の修行であった。真理に迫ろうとするソーロウの精神は徹底的に自然研究に向かい、神の世界に没入するように彼に迫った。これをソーロウは『一週間』（*A Week on the Concord and Merrimack Rivers*, 1849）の扉の詩に象徴的に記した。この詩の第2聯は出発と到着の差はあるが、『般若心経』の呪文に似ている。

私は行く 私は行く 遙か遠い岸边へ
 孤島へ 遙かなアゾレス島へ
 そこにある そこにある 求める宝が
 私の人生のわびしい小川の不毛の砂地に。

参考までに心経を見ると多くの訳があるが私はこう訳している。

私は苦しみの此岸から 彼岸に着いた

喜びの彼岸に着いた 悟りの彼岸に着いた

すべての人々も渡り着いた 悟りの道は成就された

めでたし めでたし。

彼が求めた楽園であるアゾレス島に到達して真理を手に行けることをソーロウは願った。また、『一週間』の第7章「木曜日」には「天才とは創造者、靈感者、超人であって、探求されていないことについて完璧な作品が書ける人である。芸術家とは天才の作品を観察して、そのなかに法則を発見する人のことである」と書いた。エマソンやソーロウ達は性善論者で、無限の可能性を信じ、肯定的人生観を抱いた。超絶主義は南北戦争で崩壊するが、第2次世界大戦後、新世代の詩人達の間で超絶主義が変貌して再生した。超絶思想は自然を通して神と対面し、精神の自由、個人の尊重、驚異の感覚を強調した。その代表的作品はエマソンの『自然論』と自然を最重要視して精神と肉体を同程度のものと見なしたソーロウの『ウォルデン』とである。自然は常に精神を語るといふ倫理を最重要視したエマソンの思想は“Self-Reliance”(1841)に結晶した。彼は教会、伝統、社会などのような外面的権威を拒否したのであって、Self-Relianceの根源は神である。彼は「内なる神のみが宇宙の神を礼拝する」(日記1830.12.10.)と書いた。スウェーデンボルグ思想の影響だと思われる精神と物質の対応関係の思想によって直観的に真理を捕えるのがエマソンの真理把握法である。「私の精神は神から与えられる直接の啓示である」(日記1831.12.19)というようにすべての真理は直観によって把握されるとエマソンは信じた。彼は「芸術論」(『随筆集(上)』)において、芸術作品には実用芸術と純粋芸術(the useful and fine arts)があり、芸術の目的は模倣ではなく創造だと言った。精神活動に見られる要約と選択こそ単純な象徴によって大きな意味を伝えられると教える崇高な靈感の入口(the inlet of that higher illumination)である。しかし、芸術家は自分がつ大きな意味を伝えるために彼の時代と国家で用いられている象徴を使わなければならない。こうして、芸術における新しいものは常に古いものから作られるのである。時代精神が芸術作品

に不滅の刻印を押し、想像力によって無限の魅力を作品に与える。時代精神が芸術家に作用して、その作品中に表現されると、その作品に壮麗なものが生まれ、後代の人は、その作品中に、知られざるもの、避けがたいもの、神 (the Unknown, the Inevitable, the Divine) を認めるようになる。最高芸術に示された巧妙な技巧は本源の靈魂の再現であり、純一な光の投影である。芸術家の人格に備わっていない高尚な思想を彼の手が作ることは出来ないとエマソンは悟った。

フェノロサは芸術作品の優劣は我々にある観念を与える優秀性と完全性によって計算されると考えた。彼の『東亜美術史綱』には、雪舟と北斎についての興味深い評価が見られる。雪舟の線描は直線と稜線の傑作で、中国美術最高の気韻生動が明白であり、精霊が感動を与えると賞賛している。雪舟の木も石も感動的で、李龍眠、ミケランジェロなどと同列の最高画家の一人だと考えている。仏陀を描く時には外形ではなく、崇高な精神を描き出さなければ宗教画ではなく、作者は心身を清浄にしてから描くべきで、もし、そうでなければ職人技にすぎないとフェノロサは強調している。高邁な雪舟に比較すると、北斎は低俗な画題を扱い、手法と構想も卑俗で、庶民生活そのままを描いたが、ミレーのような農民の崇高さ、精神性、真の情調を描いた風俗画家ではなく、北斎は品格に乏しい戯画家である。北斎が描いたような奇怪な日本は彼の想像にすぎなかった。しかし、北斎は多作という点では注目すべき世界的巨匠の一人であるとフェノロサは述べた。

当時のマサチューセッツ州は教育に熱心であった。元来、ピューリタンは感情よりも理性を重視するために、牧師はもちろん、教会の正会員になるためには高度な知識を要求された。独立以後、教育は共和国思想よりも愛国主義と結びついた。対英戦争(1812)以来この傾向はさらに強まった。超絶主義者の間でも教育は大問題で、オールコット (Bronson Alcott)、ピーボディ (Elizabeth Peabody)、ソーロウなどは一時的にしても私塾を開いていた。ブルック・ファーム運動も教育の重要性を唱えた。エマソンは信念の相違を理由にブルック・ファームには参加しなかったが、その計画の意義を高く評価していた。彼は当時の学校教育とは異なる教育を考えていた。その教育とは Self-Re-

liance を教えるものであり、大自然に学ぶものであった。自然は文化に宿る虚偽を矯正し、心身を癒すための治療薬であった。社会とは病院であり、薬とは自然にほかならなかった。人間とは社会という廃虚に陥った神であって、自然のなかで神の一部になった自分を発見することがエマスの主張する教育であった。さらに、自分を信頼することは自分のなかに住む神を信じることであった。エマスは随筆「教育論」のなかで、教育の秘訣は子供を尊重することだと強調した。それは“God dwells in thee”だからであり、森のなかで人間が神の一部になるためには子供に戻らなければならないと主張した。エマスが言う理想的人間とは、自分の魂が神だという認識をもてる人間のことであり、こういう人が「アメリカの学者」であり、「代表的偉人」であった。少数の超人が人間であって、一般大衆は「くず」だというのがエマスの意見である。“A man is a god in ruins”と賛美し、“Masses! the calamity is the masses”と軽蔑した。しかし、「超人になれ。自分の魂のなかに住む神を信ぜよ」とエマスは激励した。人間の無限の可能性を信じてすべての人間を神にまで高めようと彼は努力した。しかし、これは抽象世界のことである。エマス自身は絵に描かれた神を自分だと言われて大いに喜んだ。

日本とアメリカは異なった文化の伝統をもつ国である。アメリカから見ると日本は異国趣味の対象で、フェノロサの日本とかハーンの日本とか言われるが、第2次世界大戦後の日本人の生活は急速にアメリカ化した。アメリカ人の実際主義と日本人の現実主義には共通性があるから日本は容易にアメリカ化したに違いない。19世紀のアメリカ人にとっては、勤勉、禁欲、節約によって社会的に認められた名誉と地位を得ることが人生の目的であった。彼らの生き甲斐は社会的成功にあったが、今日のアメリカでは立身出世主義的価値観は見直されてきている。開拓者時代のアメリカと平和と安定が求められているアメリカとでは同一標準では考えられない。かつて、エマスは「私は透明の眼球になる。私は無であり、一切を見る大霊（神）の流れが私のなかを循環する。私は神の一部である」と言うことができた。エマスよりも先見の明があったソーロウは「私は自然のなかに溶けてしまう」と言うことができ、いずれも合理主義的理解を超越したものである。しかし、注目すべきことは喜びの源泉は自

然と人間の調和のなかに存在するとエマソンが考えたことである。第二次世界大戦後の日本人はかなり自由に生き方を選べるようになった。超越的存在である神や自然などとの関係に友情という言葉が使われたのは一種の霊的体験であって、そこから得られる靈感が幸福の源泉だという浪漫主義的幸福感がエマソン達にはあった。アメリカ超絶主義者にとって、霊的体験こそ幸福の源泉であった。フェノロサはこういうエマソンにひかれて、その作品を愛読した。自己信頼も報償の精神も自由な行動も両者に共通している。両者とも精神的には愛国者であったが、革命時代の問題である宗教と美術の関係については正反対の方向を見ていた。

明治維新後には日本の伝統美を発見し評価した有名な西洋人が多い。そのなかで、フェノロサと最もよく比較されるのはハーン (Lafcadio Hearn, 小泉八雲, 1850—1904) である。ハーンはギリシアに生まれ、父はアイルランド人の軍医で母は地中海イオニア諸島の人であった。1年半でダブリンに帰ったが、母は宗教上のことで離婚してハーンは寂しい少年時代を送った。1863小学生時代に左目を失明し、右目もひどい近視で彼の写真は常に同じ反面を見せている。小男の彼はフランスでカトリックの学校に入ったが、反感を抱いて中退して渡米し、1882初春から87初夏までニューオルリーズ・タイムズ・デモクラット (New Orleans Times-democrat) 紙の記者として、フランス文学の翻訳や随筆の社説を書いていた。同時に、スペンサー研究に没頭していた。ハーンは1890 (明治23年4月4日) に来日し、フェノロサとは短期間、同国人として会ったらしい。そして、自然科学者、数学者のボストンの名門に生まれ、大学卒業後、ヨーロッパ、中東などを訪ね、6年ほど実業家として静かに暮したが、1883年春に友人ビゲローが日本美術と仏教に熱中しているのに誘われ来日し、日米間を何度も往復して、日本について3冊の小冊子を出版したローエル (Percival Lowell, 1855—1916) の『極東の魂』 (*The Soul of the Far East*, 1888) というパンフレットを読んでハーンは強烈な印象をうけた。しかし、一年後には日本人の本質である折衷主義を見落しているとローエルを批判した。ローエルは他に『能登』 (*Noto*, 1891), 神道の神秘主義にひかれた『神秘の日本』 (*Occult Japan or the Way of the Gods*, 1894) という小冊子

を出版している。ハーンは松江中学教師になり、年末に小泉セツと結婚した。その翌年11月に五高教師になり、1894年には神戸の「クロニクル」紙記者になり、『知られざる日本の面影』（1894）『東洋から』（1895）『こころ』（1896）『亡霊の日本にて』（1899）『影』（1900）などをアメリカで出版し、日本紹介をはじめた。そのために、ボストン美術館で日本文化紹介につとめていたフェノロサの共鳴を得た。1895.2.（明治28年）帰化して小泉家をつぎ小泉八雲と名乗った。彼はアーノルド卿（Sir Edwin Arnold）の『アジアの光』（1879）を読んで仏教を知り、万物の背後に心霊の活動を見るという青年期のエマス的な神秘思想を抱いた。その頃、チェンバレン（1850—1935）という日本研究家が来日し、気質的には反対であったがハーンは親しくなった。ハーンは論理的な行動力に乏しかった。リジーとこじれた挙句に離婚していたフェノロサは1895年に1890—92に鹿児島造士館で教えていたW・L・スコットと離婚して、ボストン美術館でフェノロサの助手をしながら連れ子アランと暮しているメアリー・E・マクニール（1865—1954）と再婚した。彼女は地方女流小作家であったのでハーンの名前を知っていたかも知れない。ハーンはその8月東京大学文科大学講師として英文学を講義し、その間の明治34年にアメリカで『民間伝説拾遺』（*Folklore Gleanings*）を出版して日本文化紹介につくした。そのなかには明治23年来日して松江に住んだ直後からはじめた「わらべ歌」による日本各地の子供の歌の記録がある。手まり、羽子板、子供の和服などに美を発見した。また、鳩、とんぼ、蝶、雀、かたつむりなどの歌をまとめた。しかし、子守歌のような一種の労働歌は嫌いだった。東京大学を1903（明治36年3月）に退職し、翌年4月東京専門学校（早稲田大学）講師になったが、9.26. 狭心症で急逝して、雑司ヶ谷墓地に葬られた。それ以前1896（明治29年7月）新夫人と再来日したフェノロサはハーンを訪ねたが会う機会がなかった。就職口のないフェノロサは一旦帰国して、再び1897.6.4. 東京に落ちつき、ハーン家とフェノロサ家の短期間の交際がはじまった。就職先のないフェノロサを助けてメアリーはいろいろな作品を書いた。西洋文化に幻滅を感じたハーンは日本生活を欧米へ伝えた。ハーンの死後、弟子達がノートによって大学の講義をまとめ、『人生と文学』や『英文学史』などが刊行された。また、日本の古典や民話に

基づいた『怪談』はよく売れた。節子夫人を通して見た無償の愛に生きる日本女性は、ハーンに衝撃を与え、そのいきさつも彼は書いた。直接生活で日本を愛したハーンとフェノロサとは美術的、歴史的にも日本を愛した。比較すれば、ハーンが好意的に日本人に近づいたのに対して、フェノロサはアメリカ人として日本美術界の発展に貢献をした美術研究家であった。メアリーは『神々のいぶき』（1905）、『竜の画家』（1906）などの小説を書いたり、日本国内の一人旅をしたり、能や絵を見物し、夫が謡曲や漢詩を学ぶのを見たりして、かなり日本を理解していた。80年代のニューオルリーズ・タイムズ・デモクラット紙の仕事の続きが90年代のハーンの批評であったと言える。ハーンの理想主義弁護と科学思想攻撃と芸術への執着とが彼の社説には見られる。彼のボードレール論やフローベール論と並んで、梵文学と仏教に関するハーンの関心も大きかった。梵文学に関する彼の初期の社説は熱心なキリスト教徒に攻撃され、この新聞は不信仰だと非難されたりした。

仏教を唯物論と同一視するアメリカ人は多い。ハーンは釈迦の話とは美と財産と地位とから得られる一切を捨てて真理だと信じることを説くために出発する一人の若いインドの王子の感動的史劇であると受けとめた。仏教哲学がアメリカの文明精神、物質万能主義と異っているところは仏教の「四（聖）諦」を見れば明白である。

①生きることは苦しむことである。

②苦の原因は煩悩である。

③苦を減すとは煩悩を断つことによって到達される。

④煩悩を断つことは仏陀の教説を守ることによって到達される。——この戒律を守ることによって人は涅槃、即ち寂滅に到る。また、「生存の積み重ね」である「五蘊」に関する仏陀の教説も難解であった。完全な善人は遂に涅槃に入るか、死直後に消滅するのだが、無数の印度の塔に彫られている仏教の法則は、教祖が不可知論者ではなくて独断主義者だということを示していると考えていた。また、生が苦であり、死が完成であるという信仰は、アメリカでは、誰も理解することが出来ない。文明から生まれた物質万能論者や不可知論者は、生存は破滅から生じ、寂滅の幸福を得るためには我欲を棄てねばならない

などという論を認めることはできない。仏教で賛嘆すべき汎神論は哲学的にはさらに荘厳なヴェーダ経からの借物である。進化論に調和する転生説も仏陀の出生以前に説かれていた。しかし、仏教は実際の宗教として、自由思想や不可知論に反対するものである。仏教は一部の国では強固な教会組織を持ち、敵対する宗教には、中世キリスト教と同様に好戦的であった。また、印度の救世主の化身と伝記と奇跡は古代拝火教から発達したバラモン教伝説から出たものであるとか、人類を救うために召されたと信じて王位も財産も快楽も愛情も捨てて出家して法を説いた王子が存在したか否かなどは、人生に美と真とを求める人にとっては問題ではない。仏教は驚異的に神聖な、愛と善と美の理想を創造して、人類に無数の奉仕をなしたことは確実である。というようなのが、若いころ、ニューオールリーズ・タイムズ・デモクラット紙に書かれた社説から概略受けとれるハーンの仏教観である。

フェノロサの最大の功績は仏教美術と並んで「能」の世界的紹介である。フェノロサは貴重な著書を残した。さらに、未完成だが、1913年後半にイエイツの助手だったパウンド (Ezra Pound, 1885—1972) がフェノロサの遺稿管理人になった約10冊のノートがある。フェノロサの遺稿には、日本と中国の文学についてのノート、李白などの漢詩の英訳、随筆、論文などにまじって、能に関する覚書とかなりの謡曲の翻訳がある。フェノロサは1880 (明治13年) 梅若実 (うめわさね) に師事して能楽の稽古と研究を始め、その後、中断したが、第3回目の来日 (1898, 明治31年) で東京高等師範学校外人教師になった時に知りあった平田禿木 (かぶき) の仲介で梅若実に再入門して本格的に能楽研究を再開した。60以上もある彼の謡曲翻訳は平田が下訳して、彼が推稿した。また、1899 (明治32年) にはフェノロサは通訳 (有賀長雄) 付で森槐南 (まきくさ) の漢詩の講義を聴講し、天心 (てんしん) もフェノロサの漢詩翻訳を援助した。1900に一旦帰米したフェノロサは翌年最後の訪日の時に能や漢詩の研究に打ちこんだ。帰米後は大作『東亜美術史綱』執筆のための資料収集や東洋美術に関する講演に奔走した。1908にフェノロサはこの大作の草稿をほぼ完成し、大英博物館で最終的な調査をしている時にロンドンで客死した。

未亡人メアリーは一旦来日して、森槐南達 (まきくさ) に草稿の添削を依頼し、完成原稿

を作ってロンドンへ引き返し、自序をつけて出版（1912）した。この序文の末尾でフェノロサの遺骨を法明院の墓に移したことに言及している。彼女はアラバマ州モーバイルの家に帰り、遺稿をパウンドに託した。パウンドは偶然に約16冊のノートの遺稿管理人になった。

パウンドはまず「錦木」「羽衣」「熊坂」「景清」にイエイツの序文（Introduction）をつけて、『高貴な日本演劇選』（*Certain Noble Plays of Japan*, 1916. 7.）をダブリンの書店から出版（限定350部）した。ついで、全訳と抄訳を含めた15曲とパウンドの序文、注釈とフェノロサの能論（‘Fenollosa on the Noh’）の章がつけられた『能——または完成された日本古典劇の研究』（*Noh; or, Accomplishment, A Study of the Classical Stage of Japan*, 1916. 大正5年）をロンドンのマクミラン（Macmillan）から出版した。能はオニールやワイルダーなどアメリカ作家やその他の表現主義作家に影響を与えた。イエイツもパウンドも能に刺激されて劇を書いた。能はパウンドを魅了した。能はNoh play として世界に知られることになった。能にひかれたイエイツの *Four Plays for Dancer* (1921) のなかの第1作 *At the Hawk's Well* が、1916年4月に友人宅で上演され、その観客中に青年T・S・エリオットがいたことも不思議な縁である。フェノロサと能の問題は注目すべきものであり、ドナルド・キーン、和辻哲郎、矢野峰人、その他の東西の多数の研究者達がすぐれた翻訳・専門研究を多数発表している。

フェノロサの墓はロンドンから、得度受戒して諦信と法名を与えられた三井寺へ帰りたいという彼の遺言にしたがって、末亡人や友人達の努力で、三井寺山内の法明院墓地に移された。墓碑は弟子の井上哲次郎の撰である。1927. 10. に墓は改修された。フェノロサに授戒した桜井敬徳律師の墓も、一緒に受戒したビゲロー月心居士の分骨（アメリカにもある）も、フェノロサを法明院へ紹介した町田久成の墓もここにある。13回忌の1920に東京美術学校講堂前に井上哲次郎撰の長文の記念碑が建てられた。大津にフェノロサの墓があるのは仏教で言う「縁」である。桜井敬徳律師は尾張に1834（天保5年）に生まれ、10歳で出家して、1861（文久元年）法明院住職になり全国行脚中に1881（明治14年）に出会った博物局長の町田久成に授戒し、1889（明治22年12月）に東京で入寂

した。島津一族の町田久成（1838、天保9年生）は民部と通称し、石谷と号し、島津斉彬の命令で江戸の昌平黌に学び、平田篤胤に入門して国学を学んだ。26歳で藩の大目付になり洋学教育機関の開成所学頭になり、1865（慶応元年）3月に藩命で森有礼、吉田清成ら薩摩藩イギリス留学生17名の取締として密出国し、慶応3年2月のパリ万博に幕府使節と並んで薩摩・佐賀使節が開会式に出席して問題になったことは余りにも有名な話である。しかし、町田はひどく古美術にひかれ、慶応3年4月にロンドンを出発して6月に鹿児島へ帰った。1868（明治元年2月）、維新政府に外国事務取扱として明治2年7月に設置された外務省に勤めたが、明治4年7月に設置された内務省に転任になり、明治5年7月に蜷川式胤、内田正雄らと1875（明治5年）の正倉院開扉に当って入庫研究し、さらに東海近畿の古社寺宝物調査を行うなど文化行政に専念し、初代内務省博物館局長になった。そして、博物館創設を建議し、万国、内国勧業博覧会などの事業にも尽力した。彼は明治以後の正倉院では注目すべき有力人物として著名である。考古学だけでなく、篆刻にも長じ明治初期の美術研究の先覚者として知られた。しかし、博物館長を解任され、明治18年には元老院議員になったが、桜井律師入滅後、間もなく辞職し、古美術品蒐集もやめ、剃髪して諸国行脚の後に三井寺に入り光浄院住職になり、また、崇福寺再興に尽力した。1893（明治26年）9月にはシカゴ万博の世界宗教会議に出席した。この時の東西宗教の出会いを歌った詩集『東と西——アメリカ発見その他』をニューヨークで刊行したのがフェノロサである。町田は1896（明治29年）東京上野の名王院で療養し、翌年60歳で寂した。町田は古美術に詳しいことからフェノロサやビグローと友人になり、町田からフェノロサは法明院を教えられ、そこで受戒したのであった。

フェノロサがなぜ簡単に仏教徒になったかについては受戒の前年末（明治17年11月）に西本願寺の赤松連城と宗教と哲学の対談を行った時にフェノロサは完全に折伏（洗脳）され、感嘆した。赤松師は英語にすぐれ、ヨーロッパ留学の経験もあり、これが仏教徒になった契機だと言われる。明治23年帰米してからのフェノロサの活動は物質科学文明に支配されたアメリカへ東洋の精神文明を導入し新文化を新天地に実現させることに費された。そして、東洋の理想

は仏教の興隆によって果たされた日本にしか期待できず、従来は日本の実相は奇怪異様なものと誤解されてきたとフェノロサは考えていた。観音のイメージとマリアのイメージを論じたヴァン・ワイック・ブルックス (Van Wyck Brooks) による『フェノロサと周辺の人々』 (*Fenollosa and His Circle*, 1962.) や善を美とする美学を中心に論じたチゾム (Lawrence W. Chisolm) の『フェノロサ——極東とアメリカ文化』 (*Fenollosa: The Far East and American Culture*, 1963.) やツウィード (Thomas Tweed) の『アメリカ人と仏教の邂逅』 (*The American Encounter with Buddhism*) その他すぐれた研究がある。

その時期のアメリカにおける日本文化受容を日本の知識人側から見れば、天心 (1862—1913) が第一にあげられる。1906—13の間、ボストン美術館東洋部長を務めた天心が日本文化を巧妙に紹介したであろうことは想像に難くない。また、第二次世界大戦後のビート時代の禅普及は仏教東漸を物語るものかも知れない。結論として、フェノロサは日本の芸術、とくに佛教美術と能を世界に紹介した日本の恩人の一人である。

(本稿は平成10. 9. 19 (土)、大津市立市民文化会館における日本フェノロサ学会 (第19回大会) 協賛の大津市制100年記念市民公開講演に加筆したものである。)